

3節 外典（聖書の経外典）

一般に外典（経外典）と呼ばれている書物は、神の靈感によるものではないから、聖書の正典（正経典）の一部ではない。従って、神の教会においては何の権威もなく、ほかの人間的な文書と違ったどのような仕方でも承認されたり、使用されてはならない。 ※（ ）内新教出版社版

「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。・・・・・・

イエスは言われた。『わたしについてモーセの律法と預言者の書と詩編に書いてある事柄は、必ずすべて実現する。これこそ、まだあなたがたと一緒にいたころ、言っておいたことである。』 ㊦

ルカによる福音書 24・27, 44

「では、ユダヤ人の優れている点は何か。それはあらゆる面からいろいろ指摘できます。まず、彼らは神の言葉をゆだねられたのです。」 ㊦

ローマの信徒への手紙 3・1, 2

「なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。」 ㊦

ペテロの手紙 第二 1・21

※ 預言者たちに真に預言を語らせたのは、聖霊なる神であった。したがって、聖書は人間によって書かれたものであるが、なお聖霊によって靈感された神の言葉である。（脚注）

※私たちは、外典をどのように理解すればよいのでしょうか。

聖書の権威性は、神の靈感によって書かれた神のことばであることによって保証されており、「宗教改革者たちは、ルターが言ったように〈(※外典を)有益で読むのに良い〉面があることは認めつつも、それらの書物(外典)を靈感されていないものとして退けた。」(講解)「聖書の権威はその中に語りたもう神ご自身の権威である」(解説)。また、(註解)では、外典が正典の位置を占めなかった理由として次のように言う。「それら(※新約のさまざまな外典)が正典の中に位置を占めることがなかった理由を知るのに、實際上、一つの簡単な方法がある。それは、外典の書物を読んで、それらの文体、内容を新約聖書の文体と比較することである。たいていの人は、正典の書物には外典の書物に顕著に欠けている《真理の響き》があることに気付く。外典の書物は『事実において虚偽であるか、教理において誤りであるか、道徳において不健全』であることが示されてきた、と言われるのは正しい。従って、それらの書物は、事実上自らを新約聖書から除外したのである。」(註解)

さらに、(講解)と(註解)では、外典の扱いを、主イエスとその弟子たちが一度も引用したり、言及したりしなかったことを例に挙げて、神の言葉から排除している。「キリストとその弟子たちが正経典として持っていた聖書は何かと言いますと、ヘブライ語原典の旧約聖書だったわけです。……主イエスとその弟子たちとは、旧約聖書ヘブル語原典の全部を正経典として受け入れられていたことが明白です。ユダヤ教側では、紀元後90年、ヤムニヤ会議において、ヘブライ語聖書全部を正経典として確認しております」(講解)。

「外典を(※正典に)入れない基本的な理由は、それらがユダヤ人たちにより靈感された聖書として受け入れられていなかった、というのが第一の理由だったように思われるが、また、われらの主が外典から引用したり、外典に

言及することが一度もなかった、ということもある。それらの書物が、聖書の書物が持つような自己の信憑性を立証するしるしを帯びていない、という理由を加えることもできよう』(註解)。

さらに古代教会でも、正典のみが使われていた。「古代教会の公の集会での朗読が、厳密に正典書に限定されていたことは、ユウセビウスの教会史などに、はっきりと記載されている。神の教会は、神の御言葉に導かれ、養われる団体である以上、人の言葉と神の言葉とは、はっきり区別しなければならない」(解説)。